０５／０９／２５　　礼拝メッセージ　　土井義広　副牧師

主　　題：モーセの召し２
聖書箇所：出エジプト　３章１－１２節

神は４０歳ではなく８０歳になってからのモーセを選び、あの「出エジプト」という考えられないほどの壮大なご計画を成し遂げてくださいました。神が人を用いようとされる場合、私たちが一般に考えるような基準ではなく、神の基準によって人を選ばれることは明らかです。では、神に用いていただくためには、どのようなことを心がけるべきでしょうか？そのことを私たちは、先週に続いて出エジプト記３：１－１２を通して学んで行きます。

3:1 モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。
3:2 すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。
3:3 モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行ってこの大いなる光景を見ることにしよう。」
3:4 主は彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります。」と答えた。
3:5 神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」
3:6 また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。
3:7 主は仰せられた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。
3:8 わたしが下って来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。
3:9 見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。
3:10 今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」
3:11 モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」
3:12 神は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」

☆私たちが神に用いられるために必要なこととは？
Ⅰ．<u>罪を清算する</u>　　２－６節
前回、まず初めに私たちが学んだことは、私たちの罪を神の前に正しく清算するということでした。それは真の神は聖い聖なるお方であられるからでした。神が聖なるお方であるからその神に用いられるためには、私たちも聖くなければならないのです。それは私たちが神に用いられるために、決して避けて通ることのできないことなのです。私たちの罪を清算するために必要なこととは？
（１）罪の赦し＝救いをいただくこと
神はそのために、今から２０００年も前に、私たちの罪の身代わりとすべくイエス･キリストをこの地上に送ってくださったのです。この救い主イエス･キリストを自分の神として信じる以外に、罪の赦しも永遠のさばきからの救いもありません（使徒４：１０－１２）。すべての人にこの救いが必要なのです。
（２）日々の罪の清め
では、信仰をもって罪赦されていればそれだけで良いのかというとそうでもありません。信仰の故に罪の赦しをいただいた私たちにも日々の罪の清めが必要なのです。だから、私たちは罪を赦された後でも、日々、自分自身を見つめ直し、神の前に正しくない思いや行ないがあったなら、それを神に告白するのです。実に、聖餐式もそのためにあると言っても過言ではありません。聖餐式でパンや杯をいただくことによって、私たちが祝福を神からいただけるのではありません。Ｉコリント１１：２８に「ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。」とあるように、私たちはパンや杯をいただく時に、他人ではなく、自分自身を吟味するのです。
Ⅱ．<u>神（＝みことば）に従う</u>　　７－１０節
神に用いられるために必要な第２番目のことは「神に従う」ことです。神のみこころに、つまり、聖書のみことばに従うということです。私たちクリスチャンは神のしもべです。そのことは、私たちがこ

の神、イエス・キリストを信じた時に同時に受け入れたことなのです。ですから、本当に救われた信仰者は神のみこころを行なおうとし、神のみことばに従おうとするのです。必ず、そこには信仰を持つ前とは違う何らかの変化があり、行ないが伴なうのです（ヤコブ２：１４－２６）。それは、この聖書の神を自分の信じ仕えるべきお方、つまり、自分の主人であるということを受け入れているからなのです。

Ⅲ．神に用いられることを喜びとする　　１節、７－１２節

そして、私たちが神に用いられるために必要な第３番目のポイントは、神に用いられることを「喜びとする」ということです。実は、この点こそがモーセにはなかなか勝利できなかった点であり、今もなお、多くのクリスチャンが容易に勝利できない点ではないでしょうか？

まず、神とモーセの会話を見てみましょう。（１）出エジプト記３：７－１１**「7 主は仰せられた。『わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。 8 わたしが下って来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。 9 見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。 10 今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。』」11 モーセは神に申し上げた。『私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。』」**　（２）出エジプト記３：１３－１４**「モーセは神に申し上げた。『今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。』 14 神はモーセに仰せられた。『わたしは、『わたしはある。』という者である。』」。**（３）出エジプト記４：１**「モーセは答えて申し上げた。『ですが、彼らは私を信ぜず、また私の声に耳を傾けないでしょう。『主はあなたに現われなかった。』と言うでしょうから。』」**、つまり、モーセは「イスラエルの民は私を信じないでしょう」と神に申し上げるのです。すると、神はモーセを通して三つのしるし（奇蹟）、（１）杖が蛇になる、（２）モーセの手がらいのようになる、（３）ナイルから汲んだ水が地面の上で血のようになる、）を約束してくださるのです。

（４）出エジプト記４：１０－１４**「10 モーセは主に申し上げた。『ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。』11 主は彼に仰せられた。『だれが人に口をつけたのか。だれがおしにしたり、耳しいにしたり、あるいは、目をあけたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。 12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。』 13 すると申し上げた。『ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください。』 14 すると、主の怒りがモーセに向かって燃え上がり、こう仰せられた。」**…と、このようなやり取りがあって、やっと、モーセは観念する訳です。モーセは、自分が話しているそのお方が全能なる本当の神であることを知っていました。それなのに、３：１１**『私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。』**とか、４：１３**『ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください。』**と言っていることばを見るとき、モーセは自分が用いられたくなかった、特に、出エジプトなどという大きな神の御業になどとても…と尻込みしていたことは明らかです。モーセは、イスラエルの民たちがエジプトから脱出できることを願っていたのでしょうが、それは自分以外の者が用いられて欲しかったのです。

実は、こういったことは、私たちにもよくあるのではないでしょうか。例えば、「今まで、ずっとしていた奉仕なら良いけど、新しい奉仕はちょっと…」とか、「簡単な奉仕だったらできるけど、難しい責任の重い奉仕は誰か別の人に…。」と、皆さんもそのようなことはありませんか？

●どうすれば人は神に用いられることを喜ぶことができるのでしょう？

１．自分の無力さを思い知ること　　１節、１１節

確かに「神様に用いられたい！」と願うことは必要です。しかし「そうと分かってはいてもなかなかそれができない」というのが本音ではないでしょうか？では、いったいどうすれば、人は神に用いられることを喜びとすることができるのでしょう？まず、第１に、自分の無力さを思い知ることです。

この出エジプト記３章の時点で、８０歳であった時のモーセは「自分にはできない…」と、そのように考えていました。しかし、４０歳の時はどうだったでしょうか？使徒７：２２－３０に、聖霊によって語っていたステパノが、モーセに関して言及しています。**「22 モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました。23 四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。 24 そして、同胞のひとりが虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち倒して、乱暴されているその人の仕返しをしました。 25 彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みなが理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。 26 翌日彼は、兄弟たちが争っているところに現われ、和解させようとして、『あなたがたは、兄弟なのだ。それなのにどうしてお互いに傷つけ合っているのか。』と言いました。 27 すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押し**

のけてこう言いました。『だれがあなたを、私たちの支配者や裁判官にしたのか。 28 きのうエジプト人を殺したように、私も殺す気か。』 29 このことばを聞いたモーセは、逃げてミデアンの地に身を寄せ、そこで男の子ふたりをもうけました。 30 四十年たったとき、御使いが、モーセに、シナイ山の荒野で柴の燃える炎の中に現われました。」と、ここから今回のテキスト部分になる訳ですが、２５節**「彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みなが理解してくれるものと思っていました」**という部分に注目してください。４０歳の時、モーセは「自分自身が神に用いられることによって、イスラエル人たちに救いが与えられる。皆もそう理解してくれる！」とそのように考えていたのです。ここで言われている「救い」というのが、実際、どのような意味なのか、詳細については分かりません。しかし、明らかに、その当時のイスラエル人たちが願っていたこと、また、必要であったことは、エジプトの圧政からの救いでした。また、前回にも見ましたが、創世記１５：１３をご覧ください。**「そこで、アブラムに仰せがあった。『あなたはこの事をよく知っていなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。』」**、何と、イスラエルの民たちが外国で奴隷とされ、苦しみを受けるということ、また、それだけでなく、その期間が約４００年間である（参照：出エジプト記１２：４０－４１）ということまで、先祖アブラハムに預言されていたのです。アブラハムはモーセが生まれる５００～６００年前の人物です。もしかすると、モーセはこの預言を知っていたのではないでしょうか？十分、知っていた可能性があると考えるべきです。そして、モーセがこの預言を知っていたなら、自分の生かされている今の時代こそ、神がアブラハムに言われた『４００年』に近いということを理解していたはずです。「神様は、もしかすると自分を用いようとしておられるかも知れない…」そのような思いが、モーセにはあったのではないでしょうか？

しかし、皆さんも良くご存じの通り、神はその時のモーセを用いようとはなさいませんでした。神が選び用いようとされたのは、それから４０年も経って、体力だけでなく、自信さえも無くしてしまったモーセだったのです。その時の、モーセの気持ちを、また、モーセの置かれていた状況を説明するために、出エジプト記３：１のことばがあるのです。**「モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。」**という所です。この時、モーセが誰の羊を飼っていたとかということは、このモーセの召しとは全く関係のことです。しかし、この記事があるということによって、当時のモーセの置かれていた状況や気持ちが分かるのです。モーセは、自分自身の羊ではなく、自分の妻のお父さん、舅の羊を飼っていたのです。時々、日本では、「マスオさん」とかと言われるような…、そんな状態にモーセはあったのです。また、この当時、エジプト人たちにとって、羊飼いは忌み嫌われていた職業でした。創世記４６：３４に**「あなたがたは答えなさい。『あなたのしもべどもは若い時から今まで、私たちも、また私たちの先祖も家畜を飼う者でございます。』と。そうすれば、あなたがたはゴシェンの地に住むことができるでしょう。羊を飼う者はすべて、エジプト人に忌みきらわれているからです。」**とある通りです。

この時のモーセは、４０歳の時のモーセとは違い、自信に満ち溢れているモーセではありませんでした。「自分にはできない…」とそんな状態でした。でも、それが、神の前には必要なのです。私たちは、本当は弱いくせにすぐに傲慢になってしまいます。自分に自信があると、どうしても自分の力で、自分の方法で、神に頼らないでやろうとしてしまいます。「神様に頼ろう、神様に信頼してやっていこう」としないのです。実は、この４０歳から８０歳までのモーセの４０年間は、モーセに自分の力の無力さを思い知らせるための神の訓練でもあったのです。それだけでなく、忍耐力や他の者（力の無いような者）に対する思いやり、感情的なものだけでなく、知的にも神を知る時にもなったのではないでしょうか？　間違いなく、神はご自分の民を訓練されるお方です。そして、それは多くの場合、様々な試練や迫害、あるいは、挫折といったものを用いてなされます。皆さんにも多くの失敗や挫折を経験したり、苦い思い出があるでしょう。しかし、それらがあってこそ今の皆さんがあるわけです。そのような挫折や苦い思い出というものが大きければ大きいほど、それは皆さんの人格形成においても大きく関わっているはずです。実は、それこそが私たちには必要なのです。

詩篇の作者も、過去、苦しみにあったことをこのように証しています。詩篇１１９：７１**「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」**と。また、パウロもこのように話しています。Ⅱコリント１２：７－９**「7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」**と、確かに、苦しみや失敗、また挫折などというものは、私たちにとって喜ばしいものではありません。しかし、私たちはそのような形でしか学べないこともあ

るのです。神はそのような試練を私たちに与えることによって、私たちをより精錬して（＝成長させて）くださっているのです（Ｉペテロ１：５－７**「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。:6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」**）。

２．<u>すべてのことには「神の時」があるということを受け入れる</u>　　７－１０節

第２番目のポイントは、すべてのことに神の時があるということを受け入れるということです。今日のテキスト、出エジプト記３：７－９をもう一度見ると**「7 主は仰せられた。『わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。 8 わたしが下って来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。 9 見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。』」**とありますが、ここに書かれてあることは、全て、少なくとも４０年以上前から、神はとうにご存じでした。しかし、神はちゃんと「最適な時」というものを定めておられたのです。私たち人間の側からは「願ってもなかなか聞かれない…、祈っても…」ということになるでしょうが、神には定めておられる「その時」があるのです。

これを今の私たちに適用するとき「神様の時というものがあるから何事も待っていなさい！」となるかというとそうではありません。というのは、当時、モーセに与えられた命令は特殊なものだったからです。「今、この時に、イスラエル人をエジプトから救うために、パロのもとへ行け！」と、モーセを用いることは神のご計画だったのです。しかし、私たちは違います。語るべきことばを今の私たちは知っているはずです。Ⅱテモテ４：２－４「**2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。 3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、 4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。**」と。また、ガラテヤ６：９－１０にもこのように記されています。**「9 善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。 10 ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。」**。私たちは語り続け、神のみことばに従い続けるのです。そうしていく時に、神が最善の時に最善のことをなしてくださるから、失望せずに、神に従い続けて行けば良いのです。

３．<u>いつも神がともにいてくださっていることを覚える</u>　　１２節

どうすれば人は神に用いられることを喜びとすることができるのか、最後は、神がいつもともにいてくださっているということを覚えることです。神があなたをここまで教え、導き出し、最善をなし、訓練してくださったのです。この神からの命令に対して躊躇するモーセに、主が言われたことはこうでした。出エジプト記３：１２**「神は仰せられた。『わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。』」**。私たちも主から同じようなみことばが与えられています。ヨハネ１４：１６－１８**「16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。 17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。 18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。」**、イエスを信じ救われたクリスチャンには皆、助け主であられる聖霊なる神が与えられているのです。この聖霊なる神により頼んで生きる時、神が私たちを用いてくださるのです。また、イエスはいつか必ず、私たちを迎えに来てくださいます。そのようにみことばにははっきりと約束されてあります（Ｉテサロニケ４：１３－１８など）。

前回の学びで見たように、この神はアブラハムに対して契約を結んでくださった神です。生き物を真っ二つに裂いて、その間を通るという、神からすると実に屈辱的なことです。神なら、アブラハムに「私のことばを信じよ！」と言えば済むことです。しかし、神はそうはされなかったのです。私たちの信じ仕えている神はそのような神なのです。私たちを罪から救うために、自ら十字架に向かって、礫になってくださった神…。最大の屈辱、辱めを私たちの代わりに受けてくださったのです。

神に用いられるために必要なことは、自分自身の知識や力を増すことであったでしょうか？若返ることだったでしょうか？健康になることだったでしょうか？また、最新の方法で、何かをすることであったでしょうか？そうではありません。まず、自分自身をしっかりと清め、みことばに従い、神が自分を

用いてくださるということを喜んで歩んで行くということでした。

最後に、実は、ここの「モーセの召し」に関する箇所は、私にとっても、非常に感慨深い箇所なのです。というのは、私が「フルタイムの働きをしたい」という思いがあった時に、最も問題として考えていた「どもる」という癖のせいで思い悩んでいた時、出エジプト記４：１０－１２**「10 モーセは主に申し上げた。『ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。』 11 主は彼に仰せられた。『だれが人に口をつけたのか。だれがおしにしたり、耳しいにしたり、あるいは、目をあけたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。 12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。』」**というみことばから、いろいろと考えさせられたのです。確かに、モーセのような偉大な信仰者と私とは違います。また、彼の言う**『私は口が重く、舌が重いのです。**』と、私のそれとは恐らく違うでしょう。でも、共通しているのは「自分には、～ができない」、「自分は、こんなハンディキャップを負っている」、「こんな問題がある」という言い訳です。しかし、その問題は全て神がご存じなのです。そのようなことを全てご存じの上で、神はあなたを救い、あなたをここまで導き、訓練してくださったのです！「神様、私はこんな問題があります。こんな弱さがあります。でも、私にできることなら、どんなことでもいたします。どうぞ、私を用いてください。」と、そのように願い祈るべきではないでしょうか？